

MUSASHINO^{Vol.100} *for* TOMORROW

巻 頭

挑むために可能性はある

椎名 誠

『MUSASHINO FOR TOMORROW』創刊100号記念企画

巻頭名文・名言セレクション

卒業生インタビュー

『音』へのこだわり。『音楽』への想い。

松尾謙二郎

MUSASHINO
FOR TOMORROW
創刊
100号



表紙：武蔵野音楽大学管弦楽団合唱団演奏会
東京オペラシティ コンサートホール（2011年12月5日）

January 2012
vol.100

謹んで年頭のご挨拶を 申し上げます。

学校法人 武蔵野音楽学園 理事長 福井直敬



皆様にとって、新しい年が実り豊かなものとなりますことを心からお祈り申し上げます。

顧みますと昨年は、学年末3月に起った東日本大震災や原発の事故にとどまらず、各地を襲った台風による水害や土石流などにより、わが国は自然の脅威を厭というほど思い知らされ、混乱のうちに時が過ぎ去りました。これにより失った国益は計り知れないものがあります。

しかし私は、この一連の不幸なできごとにかかわらず、貴重な体験を手にしたと思います。ひとつは、この未曾有の災害に直面してもなお、被災者の方々をはじめとする多くの国民が見せた規律や忍耐、また他人への思いやりの心と強い連帯感。これは日本の教育と文化が作り上げてきたものであり、日本人の中に綿々

と培われてきた伝統であると信じます。そして更に、災害による厳しい試練の中で、今日の苦しみや悲しみを癒し、明日へ生きる力を与える音楽の持つ偉大な力がさまざまな場面で活かされ、多くの人びとへ希望を与えた事実であります。

思うように捗らぬ災害の復旧・復興はさて置き、この震災の影響もあって現在わが国は政治、経済ともに極めて困難な情勢にあり、残念ながら国際的な地位も低下の傾向にあります。その上、少子高齢化が進み資源にも乏しいわが国の成長力を維持するには、これからの知識基盤社会を担う、心豊かで逞しく積極的な人材を育成する教育の革新、なにかんづく創造性を育む芸術教育の重要性が、今ほど問われる時はありません。

時あたかも昨年は、前述のように

社会が大きく転換しつつある状況に対応し、「キャリア教育」の学内体制の整備、大学の社会的責任としての「教育情報」の公表などが法令化されるとともに、認証評価が第二期を迎え教育の質保証が一段と進展した節目の年でありました。

本学園では、時を同じくして校舎の全面的改築を目ざす「江古田新キャンパスプロジェクト」がスタートしたこともあり、教職員一同この学内外の大きな変化を次代への飛躍の大切な糧として捕え、新しい年の教育研究の更なる向上に鋭意取り組んでまいる決意でありますので、皆様の変らぬご支援、ご鞭撻をお願い申し上げます。



▲ 武蔵野音楽学園 入間キャンパス

挑むために 可能性はある

椎名 誠
(作家)



2012年の、そして本誌100号の巻頭を飾ってくださるのは、軽妙な文体のエッセイを始め、SF小説、私小説など多彩な分野の作品を発表する一方、映画監督、写真家としても活躍

されている椎名 誠さん。世界中を旅し、さまざまな冒険をする行動派の作家ならではの広い視野から、今を生きる若者に向けてのメッセージをいただきました。

視点をどこに置くか

椎名 誠 Makoto Shiina

1944年東京都生まれ。作家。1979年より小説、エッセイ、ルポなどの作家活動に入る。これまでの主な作品は、『犬の系譜』(講談社)、『岳物語』(集英社)、『アド・バード』(集英社)、『中国の鳥人』(新潮社)、『黄金時代』(文藝春秋)など。近著は、『風を見にいく』(光文社)、『下駄でカラコロ朝がえり ナマコのからえぱり5』(毎日新聞社)。最新刊は、『あやしい探検隊 北海道物乞い旅』(角川書店)、『わしらは怪しい雑魚釣り隊 エピソードⅢ マグロなんか釣れちゃった篇』(マガジン・マガジン)、『そらをみてますないてます』(文藝春秋)。エッセイは、週刊文春連載中の赤マントシリーズが20年以上続いている。旅の本も数多く、モンゴルやパタゴニア、シベリアなどへの探検、冒険ものなどを書いている。趣味は焚き火キャンプ、どこか遠くへ行くこと。

新しい年がやってきました。昨年は3月11日の大震災と福島原発の崩壊という未曾有の大災害によって、私たちの生活感やそれに連なる未来志向にも大きく厳しい変化を強いられることとなりました。まだ被災者の皆さんはたくさん抱えて、物理的にも精神的にも厳しい状況に置かれているわけですが、日本という国の大きな組織、その組み立ての方向(政治や経済などの)は曲がりなりにも再び動き出しています。

太平洋戦争のあとに「戦後」という言葉がありましたが、今年はまだか

すると「震災後」の最初の一年という時代になっているのかもしれませんが。どちらにしても緊張感はまだひとつもほぐれていないというのが社会一般の情勢でしょう。

こうした中で音楽の専門分野を深く追求し学んでいる皆さんは、これから何を考え、どういうふうにそれぞれの価値観を自分のものにしていくか、大変難しい時期にかかっているわけでもあります。この小さな短い文章ではマクロ的に見て、今皆さんがどんな状態の中にいるのかということをし少し考えてみたいと思います。

日本という国全体がそうなのですが、その中で一所懸命に専門分野の勉強を貫いている皆さんは、基本的にはきわめて恵まれた社会環境、生活環境の中にいるのだということをまず考えてください。たとえば冬の寒い季節の中での暮らしは、よほど不便な状況でない限り、それぞれ自分の部屋の中で、学校に通う交通機

関の中で、ほどほどに温かい時間を過ごせているはずです。のどが乾いたら簡単に安全な水が飲め、空腹になったらかなり自由に自分の好みのものを食べることができます。トイレに行きたくなったら多少の例外は除いて、大して順番を待つこともなく確実に個室で用を足すことができますし、水洗装置できれいに始末することができます。余暇時間には親しい友人などと簡単に携帯電話で連絡がとれるし、都合がよければその日の夕食をそんな友人らとせいぜい小遣いのうちで楽しむことができます。



▲ゴビ砂漠では今もラクダが荷運びをしている。

これは皆さんの毎日の当たり前の日々だろうし、日本中の多くの学生がそうでしょう。それから社会で働いている大人たちもまた状況としては同じような安穏とした生活サイクルを維持することができます。当たり前のことを書いているようですが、これは日本に住んでいるからごく当たり前とを感じるだけの話で、視点を世界に向けると、むしろ特殊な——といっていいほど安全で贅沢な生活なのです。

逆にいうと、そういう安定した居場所や時間のサイクルを持たない人々というのがむしろ大勢を占めているといっているかもしれません。国連が2011年に世界人口は70億人に達したと発表しました。日本の人口はその70分の1強であるわけですが



▲この巨大な砂漠が砂嵐で一晩のうちに移動することがある。

この70億人のおよそ3分の2はいわゆる途上国といわれている国々の人口です。寒い国、暑い国、砂の国、泥の国、石の国、湿地帯、ジャングルの中などなど自然環境や状況が劣悪なことも国家が順調に発展しない一要因でもあるし、その国の社会機構や政治体制が不安定で、残酷なほど貧富の差が激しいなど、発展できない要因は種々様々です。

それらの人々の中には人間の生きる上で一番大事な「明日飲む水が確保されていない」という渇きの苦難に苦しんでいる人が20～22億人いるといわれています。また、それと対になるような事例ですが、明日その人が排泄できる場所がはっきり決まっていないというストレスに見舞われている人が、やはり推計で20～22億人ほど存在しているといわれています。



やっと生きている人々

日本は本当に小さな島国ですが、かなり植物の育成には恵まれている国土で、現在70パーセント以上が山々を含んだ森林地帯です。その山々を源流にして35,000本の川が流れています。周りは海に囲まれていますから、バランスのとれた山国であり、川国であり、海国なわけです。たくさん流れ

ている日本の川は国際的にみるとみんな小規模ですが(世界最長のナイル川は約8,000キロ、日本の最長の川、信濃川は357キロ)、全国土に満遍なく流れている人間の体に活気を与える動脈のような役割を果たしています。山から流れた水は飲料になり、海に出ると蒸発して雲になり、山にぶつかり雨となる、きわめて健康な水の循環をこのひとつの国で行っています。梅雨のころと秋の台風シーズンには、毎年必ず大量の水の供給があり、水がなくて渴えるということはありません。

こういう自然環境に恵まれているのは、日本とノルウェー、それにカナダの3国が飛びぬけています。さらに日本の北には流水が訪れ、同じころ南のはずれの南西諸島の珊瑚礁では裸で人が泳いでいたりします。四季の変化とそうした立地的な豊かさは、カナダやノルウェーを上回っていますから、世界でいちばん自然環境に恵まれた国といっても過言ではないのです。

さらに水がらみのことでもうひとつ付け加えると、日本には「国民皆水



▲タクラマカン砂漠の中にあるミーランというオアシスに暮らす人々。



▲チベット密教の聖山カイラスを目指す巡礼のきょうだい。
高度4500メートルだった。

道」という言葉があります。北海道から沖縄まで全部の家庭の水道の蛇口をひねると飲める水が出てくるといことをその言葉はいつています。実はこれは世界にも類例のないことなのです。

食物を加工するためのいちばんわかりやすく手っ取り早い燃料は木材ですが、森林国だからその供給も潤沢です。しかし、北極圏に住んでいる人たちはアザラシやセイウチなどを食料として捕獲しても、もうそのあたりは森林限界を過ぎていて草木が一本もありませんから、簡単に火を作りそれで肉を焼いて食べることができないので、彼らはエスキモー（生肉を食う人々という意味がある）という、若干蔑視の含みもある言われかたをしているのです。その逆に世界各地で広大な面積に存在する

地に置かれているという動かしようのない環境状況は、その国の円滑な発展を妨げる要因になります。

わずかな事例しかあげられませんが、ここで大事なことは人間の生活環境は、それが相対的に優れているか劣っているかということ、実はその当事者たちはうまく認識できていないということです。例えば、あまりにも恵まれた環境の中にいるとその恵まれた度合いに気がつかないといった現象があるのです。

ぼくの体験したわかりやすい例でいうと、ネパールのシェルパ族の村に行くと、頭の上には毎日満天の星空が広がっています。標高が高く空気が乾燥しているので雲のない空に星しかないのです。東京に住んでいてめったに星を見ることのない生活をしていると、ネパールに着いて数日間は全天を覆う星に圧倒され、空ばかり眺めていました。しかしシェルパ族は誰一人としてその星空に関心を持つ人はいませんでした。

あるいはモンゴルを旅したときのことですが、ここは日本の四倍の国

土を持つ草原の国です。草原だから木はあまりありません。一面の草が広がり、夏になるとモンゴル中お花畑になります。けれどモンゴル人は誰一人として花に興味を持つ者はいません。これは特に遊牧民などがそうですが、彼らがいちばん大事にしている家畜が花には危険なものがあると本能的にあるいは遺伝的にそれを継承しているのか、花を食べようとしないので、いきおい人間たちも花に興味を持たないという民族的な価値観の差が表れてくるのです。



▲アマゾンの河口ベレンでは
長さ2メートル半のナマズなどが水揚げされる。

さっき、沖縄など南西諸島のサンゴ礁の話をしました。沖縄の漁師たちは、実はサンゴを嫌っています。うっかりサンゴ礁に網をかけてしまうととんでもないことになるし、狙った魚がサンゴ礁の下にもぐりこんでしまうとお手上げです。南島の漁師たちは本当はサンゴなどないほうがいいと思っているのです。

こんなふうに価値観というもののは大きなものから小さなものまで、きわめて相対的であり、それはまた同時に激しく価値観のレベルを入れ替えたりしています。ここで私が言いたかったことは、自分の存在意義を考えると、その視点をどのくらい大きく多面的に広げられるか、ということが大きなポイントになる、ということです。



▲北極圏の人々はまだ犬ぞりが移動手段だ。



▲ ベートーヴェン 交響曲 第9番 リハーサル
(武蔵野音楽大学／2011年12月2日)



自分の指標を作る

まだ社会経験の浅い学生の皆さんはそうはいわれてもなかなか実感としてはなにをどうすればいいんだ、というとまどいの中に追い込まれるでしょう。ほくも学生のときはまったくその通りで、自分および社会というのはたぶん半径にして500メートル程度の風景で、その中で動き回り、喜び、怒り、悲しんでいた

ような気がします。これは当たり前のことなのです。

しかし、そうした精神的な閉塞を突き破る方法があります。時代や人によっていろいろでしょうが、ぼくの場合はそれを本に求めました。たくさん本をひたすら読んでいくことです。本には今ほくがちょっとだけ事例として述べたようなことの百万倍以上の話が、それこそネパールの銀天の星のような無尽蔵に近い豊富さで広がっています。知識はまだ幼稚な細胞であっても少しずつ入り込んでくるし、その蓄積によって自分なりに物事を考えるという方便が見えてきます。

ぼくは最終的に作家という職業につきましたが、今振り返ると学生ときに閉塞された感情の出口が見えずおろおろしていたときに、おびただしい数の宝の山のような本に出会って助けられたわけですから、それが回りまわって、今、自分がそうした本を書いていく役割を選ぶようになって

たのかもしれないとも思うのです。

繰り返しますが、皆さんは国際社会の中ではきわめて恵まれた環境の中にいます。その気になったら、一日や二日寝ないで、例えばひとつの楽器とタカウこともできるはずです。あるいは精神をとことんまで統一して、自分が歌っているその意味を、歌う技術ではなく、心として追及する思考時間もふんだんにあるはずです。ぼくが恵まれていたのは読みたいと思った本が世の中にうんざりあって、それを自由に読むことができたことだと思っています。思考や才能に対して、私たちの住むこの国はまだまだ温かく恵まれた環境を与えてくれているとぼくは思っています。



音楽の万華鏡 18

世紀末ウィーンの ギリシア風「音楽」

マーラーやシェーンベルクの活躍した19世紀末ウィーンで、当時から高く評価された画家が、2012年に生誕150周年を迎えるグスタフ・クリムト(1862－1918)である。ウィーン近郊の彫金師の家に生まれたクリムトは、ウィーン工芸学校で学び、エジプトの壁画、ギリシアの陶器画、中世の板絵、モザイクなどを熱心に研究した。そして、それらを世紀末の雰囲気表現する形式要素として利用しながら、独自の装飾的様式を確立していく。初期には弟のエルンスト、同窓のマッチュと共同でウィーン美術史美術館やブルク劇場の内装といった仕事を担当したが、1897年に仲間と共にウィーン造形芸術家協会を

離脱して分離派を結成した。

クリムトはウィーンの芸術家として音楽家とも親しい関係を持ち、『ピアノを弾くシュペルト』(1899、焼失)や『ベートーヴェン・フリーズ』(1902)を制作している。ここで取り上げる『音楽I』(1895)は、彼が絵画を詩作するように描くという方向に転換した、区切りとなる重要な作品と評されている。少女が奏でているリラ、右端のスフィンクス(ギリシアでは女性の顔とライオンの体を持つ獣)、左端のシレノス(山野に住む半神半獣の精)は、古代ギリシアを想起させる。リラの調子は黄金の球形となり、アポロン神の調和のメッセージを伝えていることが、右側の華やかな色使いから分かる。しかし少女の青いドレスや膨らませた髪型は当時のウィーンの流行であり、自分の調べにうっとりとしている少女のしぐさには、艶めかしさが感じられる。さらに、クリムトは実業家ダウンバの音楽室の壁を飾るために、前述の『シュペルト』と1対を成す作品として『音楽II』(1898、焼失)



▲ グスタフ・クリムト『音楽I』

を制作した。ここでは、先ほどの少女は活発で、恐ろしさを秘めた宿命的な女性へと変貌する。さらに、彼は分離派機関誌『ヴェル・サクルム(聖なる春)』(第4巻、1901年)に、ギリシア風に抽象化したカラー・リトグラフの『音楽』を掲載する。ここではギリシア神話の像は姿を消し、音符も見られないが、ギリシア風な女性の髪型やしぐさは、やはりウィーン風である。

寺本まり子(本学音楽学教授)



『MUSASHINO FOR TOMORROW』創刊100号記念企画

巻頭名文・名言セレクション

本誌は、今号が通算100号。1987年の創刊以来、年間4回のペースを一度もくずすことなく、25年間にわたって刊行しつづけてきました。このあいだには、昭和から平成への移行、6回の夏季オリンピック、9.11アメリカ同時多発テロ、携帯型デジタル音楽プレイヤーの躍進など様々な

出来事がありました。本誌は当初より一貫して単なる広報誌にとどまらず読み物としての面白さにも配慮し、毎号の巻頭に多彩な分野の著名人にご登場いただき、原稿、お言葉を掲載してきました。その中から印象深い一節、改めて心に刻みたい言葉をセレクトしてご紹介します。



■串田孫一さん(哲学者・文学者) 音楽を学ぶ人たちに Vol.1 (1987.4)

音楽の本当の役割は、それを聴く者の心を慰め、生きる勇気と、この世に生きている深い喜びを人にしみじみと味わわせることだと思う。勿論それ

以外にもいろいろの役目はあろうけれども、これは決してささやかなことではない。



■木村英二さん(音楽評論家) 異端ではなく、異色であれ Vol.3 (1987.10)

昔から「十人十色」と言うくらいだから、一色にならず、せめてその「十色」を生かしたらどうか、そうすれば「異色」ではあっても「異端」にはなるまいと言っているのだ。時流に流されるの

ではなく、付和雷同、つまり同ジテ和セズではなく、和シテ同ゼズで、自己のアイデンティティーに忠実に、自分の真実の声、要求からしみ出た創造をしたらどうだろうか。



■山田 昇さん(登山家)

喝采もなく拍手もなくつねに先があるから山に登る Vol.7 (1988.10)

少しでも荷物を軽くしたい登山で、8,000mくらいまではウォークマンを持って行きます。仲間とテープの交換をして聴きますけど、不思議にクラシックが多いんです。普段はポップスやロックを

聴いているんですが、山へ行く時はクラシックを持って行く、という人が多いのです。圧倒される大きな自然の中では、やはり音楽も大きなものでなければ釣り合いがとれないのかもしれない。



■山口淑子さん(歌手・女優・参議院議員)

いつもプリマドンナだったわが師、三浦環先生の思い出 Vol.15 (1990.10)

(三浦環先生に)聞きました。どうしてプッチーニの激賞を得たのか、何をプッチーニから教えられたのか、何が外国のプリマドンナ達と違うのか、どうしても知りたかったのです。先生は答えてくれました。

「私のバタフライは、ピアノシモが生命なの。イタリアーの人達は身体も大きいし、声帯も違うでしょ。その中で競争するには、日本人で小柄な私はピアノシモを大切にしたいの。ピアノシモが私の生命なのよ」

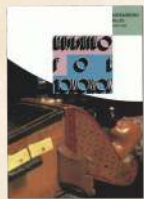


■森本哲郎さん(評論家)

音楽は、静寂というカンヴァスの上に描かれた絵である Vol.19 (1991.10)

私たち日本人は農耕民族、田植えの民族です。田植えの時、腰の後ろにつけた苗を抜いては植える、抜いては植える。それが2拍子なんですね。

イチニ、イチニとなります。ですから今でも、どんな音楽を聞いても手拍子を打って、皆2拍子にしようんです。



■三浦雄一郎さん(プロスキーヤー)

遠くて高い夢へあきらめずオンリー・ワン Vol.22 (1992.7)

世界一を夢見て志して、たどった道。それは、世界一かどうかは知らないけれど、自分の分野での、世界で誰もやったことのないことを、やり遂げたことは確かである。ナンバー・ワンかどうかは知ら

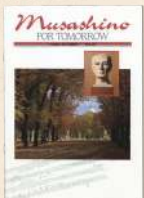
ないけれど、オンリー・ワン。自分の世界の最高峰には誰でも、一歩ずつをあきらめないで登り続けられればどりつける。芸術の世界にも、同じことが言えるのではないだろうか。



■池内 紀さん(ドイツ文学者) 町に歌あり、人に歌あり Vol.24 (1993.1)

(ブラティスラヴァに) 三日ばかりいてウィーンにもどった。帰りの列車で制服姿の女車掌が検札にきた。列車は山一つないハンガリーの平原を走っていく。途中で日が暮れた。小刻みにゆれる

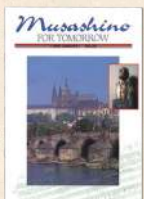
車室のドアごしに鼻歌が聞こえた。外にでると、先ほどの女車掌が通路の窓にもたれて、金髪をかきあげながらモーツァルトのひと節をくちずさんでいた。目があったとたん、ニコッと笑った。



■コシノ・ヒロコさん(デザイナー) 意志と、努力と、ライバルと… Vol.27 (1993.10)

私は、デザインをすることは、神が与えた私の使命だと思っています。それくらいの意志というか使命感がないと、やっていける世界ではないのです。

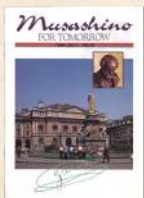
皆さんもそこまでの理想を持って、進んで欲しい。少なくとも、日本を制覇するだけでなく、世界を制覇するのだ、という理想を持って欲しいと思います。



■兼高かおるさん(ジャーナリスト) 音楽はボーダーレスのパスポート Vol.28 (1994.1)

音楽ができるということは、世界に友人ができるということ、一種のボーダーレスのパスポートだといえるでしょう。ちょっとした集まりの席で

も、ピアノなんかサッと弾いたら皆と仲良くなれて、注目の的にもなれます。

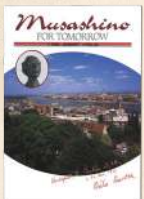


■フランク・ベנקリシュートーさん(指揮者・作曲家)

素晴らしきもの、その名は「音楽」 Vol.30 (1994.7)

私には、一緒に演奏しているメンバーや、温かい心で聴いていただいている聴衆の方々が、私自身の兄弟や姉妹に思えてくるのです。素晴らしい音楽の旅には、常に良い絆を持ち続けようとする国際的な家族を、結実さ

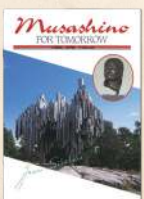
せるための種子が備わっています。そして今、苦悩に満ちた世界は、助けを求めています。それが音楽に与えられた使命なのです。そのような世界に対して、音楽家が先頭に立って救済していかなければならないのです。



■エレナ・オブラスツォワさん(声楽家) 明日は今日よりうまく歌おう Vol.32 (1995.1)

コンクールに参加する人は、強い意志を持っている。自分自身を常に高い位置に置くよう目指すこと。自分が最高の歌を歌えるのかどうか、コンクールはそれを試す場である、と思うことが

大切なのです。私は今でも、常にこう思っているのです。「今日は昨日よりもうまく歌おう。明日は今日よりもうまく歌おう」と。



■辻 邦生さん(小説家) 美の根源としての至福 Vol.33 (1995.4)

エトヴィン・フィッシャーが言うように、われわれは死というものを深く感じ、それを考えることによって、生がどんな貴重な素晴らしいものであるか知ることができます。そのとき美が官能を

通って精神に高まる喜びだということも実感できるはず。音楽も文学もこの至福の喜びを人々にわかち与えることだと私はいま強く思わずにはいられません。



■黒田恭一さん(音楽評論家) 音楽を愛すること Vol.57 (2001.4)

演奏するにしろ、きくにしろ、音楽との関係は、まず、音楽を愛することから始めたほうがいい。愛せてもいない音楽を演奏して、きく人を感動さ

せられるとは考えにくい。好きでもない音楽をきいて、その音楽本来の輝きなど感じられるはずもない。



■立松和平さん(小説家)

道元の言葉より Vol.64 (2003.1)

「無常迅速 生死事大」なんとよい言葉であろうか。志を持った人なら、こうと決めた道をまっしぐらにいくべきだ。時はたちまち過ぎていくのだ

から、仏道をいく道元は生死を明らかにすることが大事なのである。音楽大学で学ぶ諸君ならば、「無常迅速 音楽事大」ということになるのだろう。



■宇野功芳さん(音楽評論家)

自分だけの音楽をもとめて Vol.75 (2005.10)

指示待ち族が増えたり、ニートが増えたり、そんなことで《自分だけの音楽》が創造できるだろうか。どんなに技術的に優れていようとも、先生に教えられた通り弾くだけ、楽譜に書いてあ

ることをそのまま音にするだけでは感動的な音楽は生まれない。作曲者の強烈な個性は演奏家の強烈な個性を通じてしか音化されないのだ。



■有森裕子さん(マラソンランナー) 才能なき者、努力するのみ Vol.87 (2008.10)

人より努力しないと自分はダメになる、そういう危機感を常に持っていました。高校・大学時代の成績が物語るように、世界の舞台を目指す才能

や素質が私にはありませんでした。「才能なき者、努力するのみ」です。



■三田誠広さん(作家・武蔵野大学客員教授) 音楽のある生活 Vol.90 (2009.7)

「芸術」に関わる時には、人は孤独に耐えなければならぬし、自分がやる以外にないという責任を負わされることになる。それができない人は、芸術家にはなれない。だがこれは、芸術に限った

ことではない。どんな仕事でも、その仕事を果たしている瞬間には、他の誰にも代行できない責任を負うことになる。

* 著者・発言者の肩書きは掲載当時のものです。



『MUSASHINO FOR TOMORROW』表紙の変遷

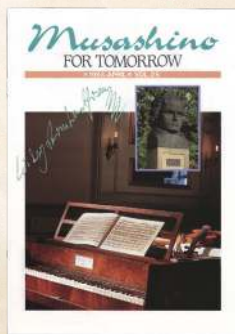
本誌は、過去何度か表紙のイメージチェンジを行ってきました。
創刊号から現在まで、どのような変遷をたどってきたのかご紹介します。



「楽器」シリーズ

(Vol.1 ~ Vol.24)

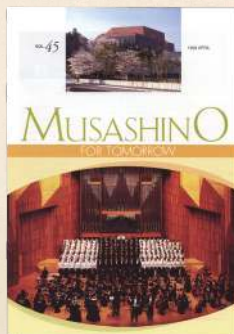
バッハザールのコンサートオルガンを皮切りに、さまざまな楽器を紹介。大半が本学の楽器博物館に所蔵されている貴重なもので、楽器紹介は現在でも「武蔵野音楽大学楽器博物館だより」として続いています。



「作曲家」シリーズ

(Vol.25 ~ Vol.44)

大作曲家と、その人物にちなんだ街や建物、楽譜等の写真で構成。ベートーヴェン像を始め、モーツァルト像、バッハ像など本学の江古田と入間の両キャンパス内に設置されている胸像の数々も誌面を彩っています。



「本学園のホール」シリーズ

(Vol.45 ~ Vol.48)

本学園のバッハザール(入間)、ベートーヴェンホール(江古田)、モーツァルトホール(江古田)、シューベルトホール(パルナソス多摩)の各ホールを、建物とそこで行われた演奏会風景とともに紹介しました。



「演奏風景」シリーズ

(Vol.49 ~ Vol.72)

管楽器、打楽器、弦楽器など、さまざまな楽器を演奏している奏者の手元をアップで撮影。手だけの出演にもかかわらず、本学で教員を務めている大勢の演奏家の皆さんにご協力いただきました。



「演奏家」シリーズ

(Vol.73 ~)

本学園にゆかりのある演奏家が表紙を飾るシリーズ。佐藤美枝子さんから始まり、クルト・グントナー教授、レイ・E. クレーマー教授、ケマル・ゲキチ教授、ツォルト・ティバイ教授など世界的な演奏家が数多く登場しています。

卒業生インタビュー

『音』へのこだわり。『音楽』への想い。

● 松尾謙二郎 (コンポーザー／クリエイティブディレクター) ●

深閑とした森の斜面に敷かれた、長さ44m、鍵盤数413の木琴。その上を、木の球がバッハのカンタータを奏でながらゆっくりと転がっていく——。この印象深く癒しに満ちたNTTドコモのプロモーション映像「森の木琴」が、昨年の「カンヌライオンズ国際クリエイティビティ・フェスティバル」において、フィルムクラフト部門、サイバー部門の金賞、フィルム部門の銀賞を受賞しました。同賞は「クリオ賞」「One Show」と並ぶ世界三大広告賞の一つであり、広告業界では最も権威があるとされているもの。この作品のサウンドデザインを担当したのが、武蔵野の卒業生である松尾謙二郎さんです。



松尾謙二郎 Kenjiro Matsuo

福岡県出身。福岡市立福岡西陵高等学校卒業。1991年武蔵野音楽大学卒業。在学中、コントラバスを檜山薫氏に師事する。フリーの作曲家、webデザインの仕事を経て、一時イギリス遊学。帰国後、サウンドデザイナーとして活動を始め、'01年、インビジブル・デザインズ・ラボを設立。大手ゲーム機、TOYOTA NETZ、SONY ERICSSON等のサウンドロゴ制作を始め、CM、映像、イベントなど多彩な分野で活躍している。



▲「森の木琴」のセット ©宇佐美 毅

——受賞を知ったときの感想は？ 作品のどういう点が評価されたのでしょうか。

松尾 カンヌは広告の世界では一番大きな賞ですし、業界の人間にとっては憧れですから、やはり嬉しかったですね。長くやっていれば、いいこともあるんだなあと。賞を取れたのは、この作品のシンプルさ、ナチュラルさが、知恵を絞り面白さを追求したエントリー作品群の中で、逆に目立ち、新鮮に映ったという点があると思います。また、大震災後の日本が置かれている状況にオーバーラップして、この作品の持つ癒しのイメージが皆さんの心に響いたのではないのでしょうか。

——サウンドデザインとは、具体的にどのような役割なのでしょう。

松尾 サウンドデザインを定義すれば、作曲や音響効果なども含め、“音”がどんな目的で使われるかを考

えながら設計をする仕事だと言えます。「森の木琴」では、ロケハンから木琴の製作、音編集まで、撮影以外のほとんどに関わりました。木琴は九州の森の間伐材を使い、楽器メーカーに依頼せずに、地元の大工さん、ウチのスタッフ、別のプロジェクトで共同研究している九州大学の学生たちと共に試行錯誤しながら手作業で作りました。誰もイメージし



▲「カンヌライオンズ国際クリエイティビティ・フェスティバル」授賞式会場前の松尾さん



たことの無いものを作り、観た人を「おっ！」と思わせるためにはどうしたら良いのか、まったくの暗中模索で苦労しました。

——木琴が奏でる曲の選曲にも苦労なされたとか。

松尾 最初に候補曲をいくつか挙げたのですが、大半がバッハでした。ドビュッシーの曲やシュトラウスの「ラデツキー行進曲」なんていう案も出たのですが、試行錯誤の末、最終的にバッハのカンタータ(第147番「主よ、人の望みの喜びよ」)に落ち着きました。



——武蔵野音楽大学時代のことをお聞かせください。

松尾 在学中から映像をやっている学外の仲間と組んでアート作品を作っていたので、学校の中ではちょっと変わった奴だと見られていたと思います。ただ、音楽をないがしろにしていた訳ではありません。むしろ音楽漬けの4年間だったと言えます。専攻はコントラバスで、檜

山薫先生に師事しました。先生の一言一言には含蓄があり、人生の重みというようなものを学んだ気がします。コントラバスは学生数が少ないので、学園祭の時にはブラス、オーケストラ、室内楽など数多くの演奏会に掛け持ちで出

演したのも楽しい思い出です。

——大学卒業後、現在に至るまでの経緯を教えてください。

松尾 卒業を前にして、漠然と作曲、サウンドデザインの道に進もうとは思っていました。ですが、すぐにその道で食べていける訳がありません。最初はリクルートに契約社員で1年半働き、その後、無謀にもいきなり福岡でフリーの作曲家として活動を始めました。在学中にいくつかのアート系の賞をいただいたことで出来たツテをたどって、広告の方面へも活動の幅を広げていきました。知り合いとwebの会社を立ち上げた後、環境を変えたくてイギリスへ遊学。海外で2年半過ごした間のさまざまな出会いや体験は、直接どう役に立ったというのではなく、物の見方や考え方の面で一つ“ひねり”が効くようになった気がします。帰国後、本格的にサウンドデザインの仕事に携わるようになり、2001年に「インビジュアル・デザインズ・ラボ」という会社を設立。CM、映像、イベント等の分野で、音を中心としたクリエイティブな仕事をしています。

——武蔵野時代の経験は、現在にどう生かされていますか？

松尾 若い頃の一時期を音楽に集中できたことは人生において貴重な体験でしたし、今の仕事にもしっかりとつながっています。オーケストラの

曲やスコアを書いたりする際、アーティキュレーションの指示をする際など、武蔵野で学んだことがすごく役立っています。武蔵野で築いた人脈も宝です。「明日、ストリングスを10人揃えて」などと気軽に頼めるのも、仲間の絆があればこそです。

——武蔵野の後輩にメッセージをお願いします。

松尾 プレイヤーになれない、指導者にも向いていない、でも音楽をやりたい。私は、そう思い続けてきました。ですから、一般企業への就職活動もしませんでした。可能性があるなら、その可能性を追い続けるべきです。無責任なことは言えませんが、挑戦する人生があってもいいんじゃないでしょうか。音楽大学に来るような人は、音楽に魅力を感じ、音楽の魔力にとらわれているはず。それを突き詰めてみたらどうでしょう。グローバルな視点を持つことで、世界は広がると思います。音楽には力があります。いろいろな分野で、音楽は武器になるでしょう。

——最後に今後の抱負を。

松尾 今後は作曲の分野で、クラシック寄りのことにも挑戦したいと思っています。音楽はもともとグローバルなものですから、そうした部分をしっかり見据えて、日本だけでなく世界を舞台に活動していきたいですね。

※2011年10月27日インタビュー／文責編集部



武蔵野サウンドの競演！ 平成23年度後期定期演奏会開催

武蔵野音楽大学管弦楽団合唱団演奏会

名古屋フィルハーモニー交響楽団指揮者の円光寺雅彦氏を迎え、12月2日、本学入間キャンパスバッハザール、5日東京オペラシティコンサートホールで演奏会が開催されました。プログラムはドヴォルジャーク：テ・デウム、ベートーヴェン：交響曲第9番「合唱付き」。ソリストは、斯界第一線で活躍している本学教員が務めました(ソプラノ：山口道子、メゾ・ソプラノ：森永朝子、テノール：樋口達哉、バリトン：谷 友博、合唱指揮：栗山文昭)。昨年3月に日本を襲った未曾有の東日本大震災。演奏者一同、被災地へ思いをいたし、その復興への祈りを込めて、ベートーヴェンの「神の愛のもとですべての人々は兄弟になる」とのメッセージを力強く謳いあげました。 ※表紙写真

室内管弦楽団演奏会 ①

クルト・グントナー教授指導・監修の下、本学室内管弦楽団が結成され



てすでに4年。武蔵野の新たな顔として順調に発展し、多くの音楽愛好家を楽しませています。12月9日、本学江古田キャンパスベートーヴェンホールで開催された演奏会のプログラムは、モーツァルト：ディヴェルティメント第10番へ長調K.247、ショスタコーヴィチ：ピアノ協奏曲第1番ハ短調Op.35 (ピアノ：井上 茜、トランペット：二井田ひとみ)、ハイドン：交響曲第57番二長調Hob. I:57。特に演奏される機会の少ないショスタコーヴィチの協奏曲では、2人の若いソリストが生き生きとした音楽性溢れるサウンドを披露し、磨かれたアンサンブルで聴衆を魅了しました。

シンフォニック

ウィンドオーケストラ演奏会 ②

管・打楽器専攻の学部2年次生で編成されたシンフォニックウィンドオーケストラ。前田淳准教授を指揮者に、11月11日、本学入間キャンパスバッハザールで、グレッグスン「剣



と王冠」、ガーシュイン「キューバ序曲」などの曲目で開催されました。

ウィンドアンサンブル演奏会 ③

米国で幅広く活躍するバンドディレクターで、本学には2度目の着任となるジェームズ・ランブレクト教授の指揮により、12月19日、東京オペラシティコンサートホールで演奏会が行われました。本学卒業生八木澤教司氏の作品で海外でも注目を浴びる「ペルセウス-大空を翔る英雄の戦い-」、グレインジャー「子供のマーチ-丘を越えて彼方へ-」等で、ランブレクト

教授の指導のもとに磨いた色彩豊かな武蔵野サウンドを響かせ、さらに、数多くの吹奏楽オリジナル曲の中でも大曲と言われるバーンズ「交響曲第3番Op.89」を披露し、感動に包まれた客席から盛んな拍手が寄せられました。

芸術の秋を飾った演奏会

室内合唱団演奏会 ④

(平成23年9月29日／ベートーヴェンホール)
声楽専攻の選抜学生らで編成され

る室内合唱団が演奏会を行いました。プログラムは1400年代から現代と、さまざまな時代に作られたモテット、

カンタータで構成され、合唱界の重鎮栗山文昭教授の指導・指揮のもと、歴史的背景や音楽様式もふまえてきた美しいハーモニーを響かせました。そして最後には、『日本の美しい原風景を、復興の希いとともに(プ



4

プログラム掲載 指揮：栗山文昭教授“おもい”より』との思いで、三善晃編曲「唱歌の四季」が演奏され、〈朧月夜〉、〈茶摘〉、〈紅葉〉、〈雪〉、〈夕焼小焼〉と、日本人が親しみ、歌い継いできた懐かしいメロディーが、出演者たちの清新な歌声によって聴衆の心に染み渡りました。

イリヤ・イーティン ピアノ・リサイタル ⑤

(平成23年10月13日／ベートーヴェンホール)

リーズ国際ピアノコンクール優勝のほか、数々のコンクールで受賞経験を持ち、S.ラトルら著名な指揮者と共演している世界的ピアニスト、イーティン氏。今年度より本学客員教授として学生の指導にあたっている氏のリサイタルが、多くの音楽ファンを集め開催されました。本



5



誌前号のインタビューの中で、「プログラム全体の中で、神聖な音楽と世俗的な音楽を巡ることを目的としている」と教授

が語っていた今回の演奏会は、バッハから現代曲を網羅した興味深いプログラミング。熟考された解釈と豊かな表現力、さらに卓越した技術によって紡ぎだされる美しい調べで会場を大いに魅了しました。

ブラームス・ ヴァイオリン・ソナタのタベ ⑥ ヴァイオリン：クルト・グントナー ピアノ：藤原由紀乃

(平成23年11月18日／ベートーヴェンホール)

長年、母国ドイツのミュンヘン・フィルやバイロイト祝祭管弦楽団などの一流オケで活躍したグントナー教授と、幼少よりミュンヘンでピアノを学び、ロン＝ティボー国際ピアノコンクール優勝等の実績を持ち、同じく本学で教鞭をとる藤原由紀乃女史が、ブラームスのヴァイオリン・ソナタ3曲をプログラムにリサイタルを行いました。音楽の本場ドイツの伝統に基づく両氏ならではの絶妙なアンサンブルと格調高い演奏に、会場からは感動の拍手が鳴り続けました。

学生・生徒による演奏会

芸術の秋、本学園では「本学附属高等学校音楽科在校生と新卒業生によるコンサート(9/30 王子ホール) ⑦」、



6

「オペラコース試演会(11/15 モーツァルトホール)」、「ニュー・ストリーム・コンサート16 ～ヴィルトゥオーソ学科演奏会2～(11/25 トッパンホール)」、さらに、「リストワール・ド・リスト ～リストの歴史と物語～」と題した学生の企画・寺本まり子音楽学学科長監修による演奏会(11/22 モーツァルトホール)など、学生・生徒による演奏会が目白押し。これまでの研究成果を次々と熱心に発表しました。日々、自己研鑽に励む出演者にとって、実際の舞台を通じたこの貴重な経験は、今後の音楽探求へ大きな指針を与えてくれたことでしょう。



7

大盛況！ ミューズフェスティバル

昨年10月、本学園の“ミューズフェスティバル”が、入間、江古田の両キャンパスで開催されました。

第36回入間ミューズフェスティバルはキャンパスの紅葉が色づき

始めた10月22日、23日、「Nova～無限の可能性～」をテーマに開催されました。大学生、高校生は演奏や展示で、また幼稚園児のかわいい作品展や楽しい音楽鑑賞などで、テーマ

に相応しくそれぞれ日頃の研鑽の成果を競いました。

またバッハザールでは本学教員の招待演奏としてヴァイオリンの増田加寿子(ピアノ：春原恵子)、ホルンの丸山 勉(ピアノ：小池ちとせ)の各氏がそれぞれソロコンサートを開催し、多くの聴衆や学生を魅了しました。



江古田キャンパスでは60回の節目を迎えたミュージックフェスティバルが、テーマを「With」として10月28日から30日に開催され、恒例の前日祭では仮装パレードを皮切りに、ビッグバンド、ダンス、ピアノカオーケストラ、仮装オケ・ブラス⑧などの演奏で早くも賑やかに盛り上がり、本祭では招待演奏にソプラノ独唱：立野至美(ピアノ：大坪由里)によるリサイタルが行われ、豊かな声量と繊細な表現に、会場からの拍手が続きま

した。

両フェスティバルともにフルートオーケストラ、吹奏楽や管弦楽、さらに学生達によるさまざまな編成のアンサンブルが多数行われた他、各クラブや有志・団体によるバラエティに富んだ展示や模擬店などで大いに盛り上がり、学生・教職員一体となった本学園ならではの手作りのフェスティバルが、今回も大成功に終わりました。



栄冠おめでとう！(コンクール入賞者等)

(順不同、敬称略、経歴は受賞時のもの)

●第65回 全日本学生音楽コンクール 全国大会 声楽部門 大学の部

第1位入賞 鳥谷 尚子(平成22年大学卒声楽専攻 本大学院修士課程2年次在学)

入選 佐藤 優衣(平成23年大学卒声楽専攻 本大学院修士課程1年次在学)

●第23回 日本ハープコンクール2011 プロフェッショナル部門

第1位入賞 佐藤 理絵子(大学4年次在学ハープ専攻 本高校卒)

第4位入賞 三浦 麻葉(本大学院修士課程2年次在学ハープ専攻)

●第1回 三田ユネスコフルートコンクール

第1位入賞、窪田孝子賞受賞 山内 豊瑞(平成19年大学卒フルート専攻)

入選 白石 法久(平成18年大学卒フルート専攻)

●ジュリアード音楽院 2011年度 ジュリアード栄誉者リサイタルのオーディションにて選拔され、リサイタルを開催 (リンカーン・センター アリス・タリー・ホール) 大西 宇宙(平成20年大学卒声楽専攻 本大学院修士課程修了)

●ロバート・ボッシュ財団主催 日独交流150周年記念 日独友好賞受賞(2011年12月、於日本大使館<ベルリン>) 市川 克明(昭和62年大学卒ホルン専攻 本大学院修士課程修了)

●第65回 全日本学生音楽コンクール 東京大会本選 声楽部門 大学の部 第2位入賞 佐藤 優衣(平成23年大学卒声楽専攻 本大学院修士課程1年次在学)、第3位入賞 鳥谷 尚子(平成22年大学卒声楽専攻 本大学院修士課程2年次在学)、奨励賞受賞 飯塚 茉莉子(平成22年大学卒声楽専攻 本大学院修士課程2年次在学)、入選 黒田 詩織(平成23年大学卒声楽専攻 本大学院修士課程1年次在学)、入選 池田 瑛香(大学2年次在学声楽専攻)、ピアノ部門 中学校の部 第3位入賞 京増 修史(附属江古田音楽教室在室 京華中学校3年生)

●第16回 JILA音楽コンクール ピアノ部門 第1位入賞 渡邊 孝太郎(平成17年大学卒ピアノ専攻)、ハープ部門 第3位入賞(1位なし) 三浦 麻葉(本大学院修士課程2年次在学ハープ専攻)、マリンバ部門 入選 加賀谷 巧(大学2年次在学マリンバ専攻) ●第12回 北関東ピアノコンクール ソロ一般Sの部 第1位入賞、最優秀賞、朝日新聞社賞受賞 渡邊 孝太郎(平成17年大学卒ピアノ専攻)、ソロ大学生Sの部 第2位入賞 石井 伶奈(大学3年次在学ピアノ専攻) ●第14回 “長江杯”国際音楽コンクール アンサンブル部門 一般の部A 第2位入賞(1位なし) 青木 絵里子(平成22年大学卒フルート専攻 本大学院修士課程2年次在学)、田村 智沙(平成22年大学卒オーボエ専攻 本大学院修士課程2年次在学)、第4位入賞(1位なし) 堀 真裕美(平成16年大学卒音楽教育学科ピアノ専攻)、松本 理奈(平成16年大学卒音楽教育学科ピアノ専攻)、ピアノ部門 中学校の部 第4位入賞 横地 ちひろ(附属江古田音楽教室在室 桐蔭学園中学校3年生)

●2011アジア国際音楽コンクール 声楽社会人部門 第6位入賞 太田 優子(平成20年大学卒声楽専攻) ●第13回 日本演奏家コンクール 弦楽器部門 大学の部 奨励賞受賞 鈴村 優介(大学4年次在学コントラバス専攻) ●第12回 ANPル・ブリアン フランス音楽コンクール 大学・一般の部 奨励賞受賞 迫口 眞理香(大学2年次在学ピアノ専攻) ●第12回 大阪国際音楽コンクール ピアノ部門 Age-U 入選 氏本 舞(平成23年大学卒ピアノ専攻 本大学院修士課程1年次在学)、弦楽器部門 Age-U 入選 矢沢 まどか(大学2年次在学ヴァイオリン専攻) ●第5回 横浜国際音楽コンクール アンサンブル部門 入選 溝邊 奈菜(大学4年次在学ヴァイオリン専攻) ●山手の丘音楽コンクール2011 ピアノソロ部門 大学生・一般部門 入選 谷地 紗織(平成21年大学卒ピアノ専攻) ●第3回 東京国際声楽コンクール 大学生部門 入選 川口 真貴子(大学3年次在学声楽専攻) ●第8回 北本ピアノコンクール G部門 入選 木林 理絵(大学4年次在学ピアノ専攻) ●日独交流150周年記念 ローベルト・シューマン・ピアノコンクール 奨励賞受賞 松崎 紀佳(本高校2年次在学ピアノ専攻)

●第20回 全日本ジュニアクラシック音楽コンクール 木管楽器部門 高校生の部 奨励賞受賞 粕谷 隆大(本高校2年次在学オーボエ専攻) ●第21回 全日本ジュニアクラシック音楽コンクール ピアノ部門 中学生の部 奨励賞受賞 大久保 領太(附属江古田音楽教室在室 山手学院中学校3年生)、ピアノ部門 小学生の部 第5位入賞(1~4位なし) 渡久山 愛佳(附属江古田音楽教室在室 東京学芸大学附属大泉小学校2年生)、ピアノ部門 小学生的部 審査員特別賞受賞 今成 彩乃(附属多摩音楽教室在室 聖セシリア小学校1年生)、ピアノ部門 キッズの部 審査員特別賞受賞 福光 隼(附属江古田音楽教室在室 武蔵野音楽大学第一幼稚園在園)



平成24年度学生・生徒募集のお知らせ

武蔵野音楽大学大学院音楽研究科(博士後期課程)

	出 願 期 間		試 験 期 間
	郵 送	窓 口	
大学院博士 後期課程入試	平成24年2月10日消印 ～21日消印まで	郵送のみ	平成24年 3月8日～10日

武蔵野音楽大学(音楽学部)

	出 願 期 間		試 験 期 間
	郵 送	窓 口	
1年次 一般入試 A日程	平成24年1月13日消印 ～28日消印まで	平成24年 1月27日・28日	平成24年 2月18日～23日
1年次 一般入試 B日程	平成24年3月5日消印 ～15日必着	平成24年3月15日	平成24年 3月16日～18日
3年次編・ 転入学入試	平成24年1月19日消印 ～26日消印まで	郵送のみ	平成24年 2月12日～14日

- 一般入試 A 日程の受験では、国語・外国語(英または独)について、大学入試センター試験を利用できます。
- 一般入試 B 日程の受験は、国語・外国語(英または独)について、大学入試センター試験の受験者に限ります。

武蔵野音楽大学別科

	出 願 期 間		試 験 期 間
	郵 送	窓 口	
別科入試	平成24年1月21日～ 28日消印まで	郵送のみ	平成24年 2月12日・13日

武蔵野音楽大学附属高等学校(音楽科)

	出 願 期 間		試 験 期 間
	郵 送	窓 口	
附属高等学校 推薦入試	平成24年 1月13日～18日必着	郵送のみ	平成24年1月22日 入間キャンパスにて実施
附属高等学校 一般入試	平成24年 1月23日～31日必着	郵送のみ	平成24年 2月12日・13日

- * 入学試験の詳細については、各入学試験要項でご確認ください。
 - * 上記、入学試験は、江古田キャンパスで実施します。(附属高校推薦入試を除く)
 - * 各入学試験要項は、郵送及び江古田キャンパスで取り扱っています。(要項・送料は無料。)*要項の請求(平成24年度受験対象者の方)は、学園のホームページ、モバイルサイトの資料請求フォームからご請求ください。また、お電話、郵送にてご請求の場合は、氏名、住所、電話番号、および高校、大学1年次、大学3年次、大学院、別科の別をお知らせください。なお、受験講習会受講者には、第1年次入学試験要項を講習会期間中に配付します。
- 武蔵野音楽学園広報企画室 〒176-8521 東京都練馬区羽沢 1-13-1
TEL.03-3992-1125(広報企画室直通)

音楽教室(江古田・入間・多摩) 生徒募集のお知らせ

受験資格(平成24年3月末現在)

導入・初級 中級・上級コース 江古田・入間・多摩音楽教室	導入 3歳 初級 4歳から小学校1年生まで 中級 小学校2年生から小学校6年生まで 上級 中学校1年生から高等学校2年生まで
受験コース 江古田・入間・多摩音楽教室	武蔵野音楽大学附属高等学校受験 中学校1、2年生 武蔵野音楽大学受験 高等学校1、2、3年生
エクセレンス・コース (将来、演奏家・音楽家を目指す 児童・生徒のための高度なコース)	5歳から高等学校2年生まで (江古田音楽教室のみに設置しています)

- 【入学試験】平成24年3月4日(日)10時(各音楽教室にて)
◎ただし、エクセレンス・コースの入学試験は江古田音楽教室で行います。
- 【願書受付】平成24年2月13日(月)～2月25日(土)
- 【試験科目】実技・ソルフェージュ・面接。
未就学児は面接のみ。音楽をはじめて勉強される方は、音楽教室にお問い合わせください。
エクセレンス・コースの未就学児は、実技・ソルフェージュの試験を受けてください。
- 【要項請求】ご希望の音楽教室へお申し込みください。
学園のホームページからも請求できます(要項・送料とも無料)。
- ※その他詳細については、下記へお問い合わせください。
江古田音楽教室 TEL.03-3994-7536 入間音楽教室 TEL.04-2932-1111
多摩音楽教室 TEL.042-389-0711
武蔵野音楽大学附属音楽教室ホームページ http://www.musashino-music.ac.jp/music_school/

武蔵野音楽大学オペラ公演

演 目: W.A. モーツァルト《魔笛》
全2幕 ドイツ語上演・字幕付

指 揮: 本名徹次

演 出: 十川 稔

管 弦 楽: 武蔵野音楽大学管弦楽団

合 唱: 武蔵野音楽大学オペラコース合唱団

公 演 日: 平成24年4月29日(祝) 15:00開演
30日(休) 15:00開演
5月 2日(水) 18:30開演
3日(祝) 15:00開演

会 場: 武蔵野音楽大学ベートーヴェンホール
(江古田キャンパス)

料 金: A席=3,000円 B席=2,500円(全席指定)

お問合せ: 武蔵野音楽大学演奏部 電話: 03-3992-1120

主なキャスト	4月29日／5月2日	4月30日／5月3日
ザラストロ	豊島雄一	松中哲平
タミーノ	樋口達哉	曾我雄一
夜の女王	佐藤美枝子	本松三和
パミーナ	砂川涼子	前川依子
侍女Ⅰ	山口道子	飯塚茉莉子
侍女Ⅱ	小畑朱実	鳥谷尚子
侍女Ⅲ	森永朝子	吉田 静
パパゲーノ	谷 友博	望月一平
パパゲーナ	赤星啓子	今村朱里

本学モバイルサイト リニューアル

武蔵野音楽大学と武蔵野音楽大学附属高等学校モバイルサイトを、それぞれリニューアルしました。デザインも新たに大学案内や入試情報、各種講習会、コンサート、学園祭(ミュージックフェスティバル)などの最新情報を随時発信する他、今まで同様受験講習会やオープンキャンパス、クリニックなどのお申し込みが可能です。さらに「モバイル楽器博物館」など楽しいコンテンツも加わり、ますます充実しました。また、スマートフォンにも対応し、スマートフォンからのPCサイトへアクセスをしても、スマートフォン向けの表示を選べます。

ますます使いやすくなった武蔵野のモバイルサイト、ぜひご利用ください。



武蔵野音楽大学 モバイルサイト
<http://musaon.jp/>



武蔵野音楽大学附属高等学校 モバイルサイト
<http://musaon.jp/view/56589/>

編集後記

100号を迎えた本誌。創刊以来四半世紀が過ぎ、かつて武蔵野の在学生として誌面に登場し、現在ではプロの音楽家として世界を舞台に活躍している方も数多く輩出しています。椎名 誠さんが言う「震災後」を生きる私たち。日々の努力の積み重ねが、10年後、20年後の自分を決めます。150号、200号に向けて、本誌はこれからも皆さんと共に歩んでゆきます(編)。

笙 銘 節 摺

平安後期～鎌倉時代 日本 全長54cm

この笙の持つ「節摺」という銘は、竹管の節が平らに削られている、その外見上の特徴に由来している。箏製作家であり邦楽研究家でもあった故水野佐平氏寄贈の「水野コレクション」の中でも、最古の楽器としてこれまで知られてきた。この楽器については、「MUSASHINO FOR TOMORROW Vol.20」ですでに紹介したが、この度、附属文書を含む資料の詳細な調査によって、来歴などが明らかとなった。

調査の結果、この楽器は、代々楽人である林家に受け継がれてきた名器であり、天明元年(1781年)、仙台藩伊達家に譲渡されたものであることが判明した。明治期に記された伊達家宝物を記した目録には、楽器の項目の筆頭に「節摺」の名が記載されており、伊達家においても、宝物として「節摺」が大切にされてきたことが窺える。

附属の箱は、譲渡された際に、伊達家において製作されたものと考えられる。蓋の見返し部分には竹の金蒔絵が施されていて、2種の作銘が入れられている。これはそれぞれ、下絵を施した狩野栄川院典信(10代将軍家治に寵遇された幕府奥絵師)、蒔絵を施した中西



松立斎達栄(仙台藩お抱えの蒔絵師)を示すもので、歴史的工芸品として価値の高いものである。

また、笙の匏部分に施された竹の金蒔絵は、京都の印籠蒔絵師・塩見政誠によるものであり、さらに、匏上面に入れられた銘は、伏見宮邦永親王によって書かれたものと、名器と言われるに相応しい格調高さが感じられる逸品である。

なお、水野氏自身、特に思い入れの深いコレクションのひとつとして、この「節摺」を回想録の中で紹介している。

(水野コレクション・武蔵野音楽大学楽器博物館所蔵)

❖ 目 次 ❖

謹んで年頭のご挨拶を申し上げます	❶
福井直敬	
挑むために可能性はある	❷
椎名 誠	
音楽の万華鏡	❸
世紀末ウィーンのギリシア風「音楽」 寺本まり子	
『MUSASHINO FOR TOMORROW』創刊100号記念企画	
巻頭名文・名言セレクション	❹
表紙の変遷	❺
卒業生インタビュー	❻
『音』へのこだわり。『音楽』への想い。 松尾謙二郎	
MUSASHINO NEWS	❼
❖ 武蔵野サウンドの競演！平成23年度後期定期演奏会開催	
❖ 芸術の秋を飾った演奏会	
❖ 大盛況！ミューズフェスティバル	
❖ 栄冠おめでとう！（コンクール入賞者等）	
❖ 平成24年度学生・生徒募集のお知らせ	
❖ 武蔵野音楽大学オペラ公演	
❖ 本学モバイルサイト リニューアル	

武蔵野音楽大学大学院

博士前期課程・博士後期課程

武蔵野音楽大学

武蔵野音楽大学別科

武蔵野音楽大学附属高等学校

武蔵野音楽大学第一幼稚園

武蔵野音楽大学第二幼稚園

武蔵野音楽大学武蔵野幼稚園

附属音楽教室 江古田・入間・多摩

❖ 発 行 ❖

学校 武蔵野音楽学園

江古田キャンパス ●〒176-8521 東京都練馬区羽沢1丁目13-1
TEL.03-3992-1121 (代表)

入間キャンパス ●〒358-8521 埼玉県入間市中神728
TEL.04-2932-2111 (代表)

パルナソス多摩 ●〒206-0033 東京都多摩市落合5-7-1
TEL.042-389-0711 (代表)

<http://www.musashino-music.ac.jp/>

2012年1月10日発行 通巻第100号



モバイルサイト
<http://muson.jp/>